

特集 儀礼の変容

---

## 羽黒山山伏集落の現状と山岳修行の変容

—コロナ禍を通して見えてきたもの—

---

天田顕徳<sup>1</sup>

本論のフィールドである山形県鶴岡市の山伏宿坊街・手向地区では、コロナ禍によって、2020年から現在まで、多くの修行が中止されている。本論では、同地区において修行が中止されたことの持つ意味の大きさを、コロナ以前の手向宿坊街の状況も踏まえて俯瞰的に整理し、現代における手向の山岳修行の変容を描く。

---

<sup>1</sup>あまだあきのり：北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授

## 1. はじめに

新型コロナウイルスによる感染症の拡大により、私たちの生活には様々な制限が加えられるようになった。こうした制限が宗教儀礼に与えた影響も小さくない。ミサや集会の縮小やオンライン開催への切り替えなど、今日までにさまざまな事例が報告されている（玄、藤野 2020）。こうした変化は本論が取り上げる現代の山岳修行の現場にも及んでいる。

山岳修行といえば、いわゆる「3密」とは無縁の人里離れた深い山の中で行われるものを想像するかもしれない。そうしたイメージはあながち的外れではないのだが、それは多様な修行の一面に過ぎない。例えば、本稿で注目する出羽三山には、密閉された堂内で米糠に唐辛子やドクダミなど数種類の刺激性のある「薬味」を混ぜたものを火鉢に入れて焚き、その煙の中で山伏たちが密集、密接する「南蛮いぶし」という修行が存在する。「地獄界」を身をもって体験するもので、煙にいぶされた山伏たちは、涙や鼻水を流して咳き込むことになる。今風にいえば、堂内が「エアロゾル」で満たされるのだ。集団で行われる山伏達の修行には3密と関わるシーンが意外に多いのである。一般人が参加可能な修行もあり、数十人規模で集団行動をするものもある。

筆者は、コロナ禍が日本で拡大する少し前の2019年から現在まで、山形県鶴岡市にある手向地区とうげという集落に通っている。同地区は日本の代表的な山岳霊場である出羽三山の一角、羽黒山麓の門前町で、近世には八方七口と呼ばれた登拝口の中で最も多くの登拝者を集めていた場所だ。そこには現在でも山伏の経営する宿坊が複数存在している。現代の山岳信仰のありように関心を持つ筆者は、宿坊を経営する山伏達や、宿坊所縁の山伏達の調査を行っていたのである。その結果、筆者は囚らずもコロナ禍における山伏達の様子を見聞することとなった。筆者が手向地区と縁を持ったきっかけはさらに10年以上前に遡るが、ここ2年の手向の変化は当時からは想像できないものであった。コロナ以前・以後において宿坊街の様子は一変している。

他方で、コロナウイルスが宿坊街に与えた影響は、他のフィールドと比較してさほど特殊なものではない。手向の山伏たちが行う山岳修行についても同様である。先述した南蛮いぶしなどの3密を伴う修行が行えなくなり、その結果、修行の多くが中止あるいは規模を縮小せざるを得なくなった。言葉を選ばずに言えば、現下の日本では、ありふれた変化が観察されるのだ。未だ終息を見せないコロナ禍の渦中において、山岳信仰の現場だからこそ見出せる特殊性のようなものを筆者は見つけられていない。

しかし筆者は、他の宗教にも見られる「儀礼の中止」や「縮小」というありふれた変化が、手向ならではの文脈において、また山伏ならではの文脈において、極めて大きな意味を持っていると考えている。本論では、こうした「文脈」の存在に注目し、コロナ禍が手向の山伏修行に与えた影響を、コロナ以前の手向宿坊街の状況も踏まえて俯瞰的に整理することで、現代における手向の山岳修行の変容を描いていく。

## 2. 宿坊街の現状

前述の通り、手向地区は羽黒山の麓に位置する山伏の集落で、近世期には「麓三百坊」と称される大集落であった。現地には東北のみならず関東からも多くの参拝者が集まっており、「遠国檀那御祈祷新帳」によれば、志麻・飛騨・備前を除く日本全国から人が集まっていたことが確認されている（長井 1975: 168）。参詣者らは登拝に際し、宿坊に泊まることを通例としていたが、この宿坊を経営し、参詣者らの案内を担っていたのが山伏達<sup>1)</sup>である。手向の各宿坊は霞や檀那場<sup>かすみ</sup>と呼ばれる担当地域を与えられており、山伏達は各地に組織された講をまわり、配札や祈祷などの活動を行っていた。こうした活動が手向では現在でも継続している。

山伏たちのこうした活動は現在、コロナ禍によって大きな難局を迎えている。身体的な接触を避けなければならない状況で、霞・檀那場への訪問や宿坊経営が通常通りに運ばなくなり、大きな経済的打撃を被って

いるのだ。だがより俯瞰的にいえば、手向の山伏たちの経済的な難局は、コロナ禍をその端緒とするものではない。既に存在していた苦境にコロナ禍が「追い討ちをかけた」という方が、より表現が正確である。まずはこの点について確認しよう。

明治初頭、手向では平田派の国学者である西川須賀雄により、苛烈な神仏分離政策が断行された。一方で、西川は手向の山伏たちの経済力に目をつけ、神社に従った山伏に玉串を配ることを公式に認めて、山伏の経済力を維持し、神社財政に貢献させることを狙ったのである（関守 2005: 118-119）。結果、手向では明治以降も山伏の宿坊街が存続している。1877年（明治10）には327軒あった宿坊は、1882年（明治15）には368軒に増加しており、一時はその数を増やしている。神仏分離により激減していた登拝者数も日露戦争時には敬神思想の勃興により回復し、1913年（大正2）の陸羽西線の開通に際して手向は「他の登山口の登山客を独占して栄え」たことが指摘されている（長井 1975: 185）。手向の独占傾向は1967年（昭和42）に羽黒と月山8合目を結ぶバスの開通でより一層明確なものとなった。結果、手向には「昭和の中頃までは白衣に身を固めた行者が相当多く訪れていた」（長井 1975: 186-187）という。

しかし、現在手向を訪れると、こうした繁栄が過去のものであることを、まざまざと実感せざるを得ない。宿坊は2021年現在、27にまで減少し、近い将来20軒を下回るのではないかとの危惧が示されている<sup>2)</sup>。鈴木正崇は、昨今、少子化や高齢化により山岳信仰の担い手が顕著に減少していることを指摘するが、手向もそうした例に漏れない（鈴木 2015 :32）。

神社関係者や宿坊関係者などの集落内外有志より結成され、2017年より同地域の地域振興に取り組む「出羽三山門前町プロジェクト」は地区の窮状を次のように分析する<sup>3)</sup>。

特定地域から出羽三山に定期的に来訪し参拝する、信仰を中心に据えたグループ来訪のことを「講中」というが、現在、この出羽三山講中の高齢化が進み、世代交代が行われていない。羽黒山山麓の

手向地区の収入は、この講中からの収入（お札、祈祷、寄進、団体での来山支出など）が大きな柱となってきたため、講中が衰退し、来山頻度が減っていることが、地域経済の衰退に直結している。

手向においては高齢化の進展が信徒集団の先細りにつながっており、その結果、地区の収入が減少しているという見方である。続く文章では宿坊の存続が難しくなっている現状が次のように述べられている。

講中の衰退によって、出羽三山の景観を構築し、担い手の一つだった宿坊の生業が難しくなっている。江戸時代に300軒あった宿坊が、昨年30軒をきり、29軒となった。この5年間のうちにさらに10軒近くの宿坊の存続が危うくなっている。グループでの来訪客を受け入れる仕組みでできている宿坊にとって、少人数での個人来訪の受け入れは、生業構築には繋がりにくく、新たな来訪者である、観光客やインバウンド客を受け入れる体勢作りが進んでいない。

宿坊が個人来訪を受け入れづらいという点については補足しておく必要があるだろう。こうした仕組みは宿坊の施設や運営方法に拠っている。例えば多くの宿坊は、団体客用の大浴場を備えているが、単発の個人客に対して湯を張ってしまうと、利益が上がりにくくなる。また、宿坊で提供される精進料理は四季を通じて品数が多く、塩蔵した山菜の塩抜きなど、準備に大変な手間がかかる。精進料理の提供には人手が必要で、宿泊客を受け入れる際、地域の主婦の雇い入れを慣習にしている宿坊も多い。こうした仕組みは、団体客から一度に多くの収益が入ることを前提としており、個人客相手では採算が合わないのである。霞や檀那場における講や信者を主要な顧客としてきた仕組みが、行き詰まりを見せているのだ。筆者は以前の論考において、こうした状況を霞・檀那場経済の衰退と表現した（天田2020）。では、霞・檀那場経済の衰退に、手向の山伏たちはどのように対応したのか。

### 3. 出羽三山信仰の資源化

「人々の信仰の薄れとともに参拝者が激減している現状を取材、生き残りをかけて模索を続ける“三山”の今に迫る」というテーマで、フジテレビ系列のさくらんぼテレビジョン（山形）が製作した映像作品が、1999年第8回FNSドキュメンタリー大賞にノミネートされた。『消える山伏～岐路に立つ出羽三山～』という作品である。フジテレビの番組紹介では、取材を担当したディレクターの語りも交えつつ、当時の様子を次のように描写する。

ディレクターは「私は三重県出身で、取材に入るまでは全く“出羽三山”のことを知りませんでした。ネタ探しをする中で“出羽三山を世界遺産にしよう”と町が動いている」と聞いて、出羽三山に初めて足を運びました。しかし私が目にした“三山”はあまりにも世俗化していて魅力が感じられませんでした。何故、日本に唯一残る修験の山がこんな風になってしまったのか？そんな疑問を解き明かしたいと考えたのが、取材を始めたきっかけでした」と語る。

まず目についたのが参拝者減少の問題だ。“出羽三山”は、修験の山、信仰の山として人々の畏敬を集めてきたが、年を追って減り続けてきた参拝者が、ここ数年は激減しているというのだ。（中略）

参拝者の減少は、さらには麓で山伏の末裔が営む宿坊の経営にも大きな影響を与えている。あと5年か10年もすれば、崩壊する宿坊が出てくるに違いないとまでいわれるほどだ。昔ながらの形態を守ろうとする宿坊にも危機感が漂い、中には、「生活していく為には、時代に応じていかななくてはならない！」と、旅行会社と提携してドライブインとしての機能を持つところも出始めている。そこには、信仰の山に忍び寄る深刻さが垣間見える。神社も宿坊も必死に自分たちや“三山”の生き残り策を模索しているのだ<sup>4)</sup>。

ディレクターが出羽三山を「日本に唯一残る修験の山」としてとらえている

は端的な事実誤認だが、神社や手向の山伏たちが生き残り策を必死に模索しているのは確かである。2019年時点でも、先述の「出羽三山門前町プロジェクト」や「出羽三山地域魅力発信協議会」、「精進料理プロジェクト」など、いずれも必ずしも一枚岩的な取り組みとは言えないものの、地域協議会の立ち上げや参加をもって手向宿坊街の観光振興に取り組む山伏たちも少なくない。こうした取り組みに共通して見られるのが、出羽三山信仰にまつわるモノやコトを文化資源として観光の文脈で利活用する動きだ。

ドキュメンタリーが出羽三山の様子を「世俗化しすぎていて」と表現することや、当時の状況を「信仰の山に忍び寄る深刻さ」などと表現することに象徴される通り、作品は「世俗」と「宗教」を対立的・固定的に捉え、前者が後者を脅かしていくものとして描かれている。筆者がはじめて手向を訪れたのはドキュメンタリーが製作されてから10年もの歳月が経っているため、単純な比較はできないが、筆者の調査に即しているならば、手向の山伏達は「世俗」と「宗教」を番組が描くほど二元論的な対立図式では理解していない。

事例を挙げてみよう。山伏たちも多く所属し、最高位の山伏である「松聖」<sup>まつひじり</sup>経験者が会長を務める（2021年10月現在）手向地区自治振興会では、2018年10月より2020年3月にかけて、全10回におよぶ「門前町手向地区地域活力創出ビジョン策定住民ワークショップ」を開催し、地域振興策の策定に取り組んだ。このワークショップを踏まえ、2020年3月31日付で地域は「門前町まちづくりプラン」を公表している。同プランでは手向の人々が「将来にむかってみんながいきいきと輝く」ために「信仰と観光をテーマにした「にぎわいづくり」をすすめる」ことが今後のまちづくりの指針の一つとして示される<sup>5)</sup>。

また、同プランには4つの「行動計画」が設定されているが、そのうち「行動計画2」と題された項目では、「歴史や伝統文化を受け継ぎ、「本物＝出羽三山の門前町」が残された、信仰が息づく心豊かなゆとりあるまち」を目指すことが示され、以下3つのサブ項目が掲げられる。

- ・ 信仰が息づくまちづくり、祭礼行事等の後継者育成と体制の見直し、歴史的風致維持向上計画事業を活用した歴史的な街並みの維持保全
- ・ 歴史や伝統文化をテーマにした講演会や学習会、体験プログラムの実施
- ・ 歴史や伝統文化を活用した「にぎわいづくり」(提灯プロジェクト「光の道」、御朱印巡りなどの宿坊街回遊イベント)、魅力の発信

これらの項目からは、先に述べた通り「信仰」や「歴史」、「伝統」が地域振興に関わる重要な資源とみなされていることがわかるだろう。ここでいう信仰、歴史、伝統とは山伏たちが担い手となった出羽三山信仰やその歴史、伝統を指しており、自治振興会では山伏文化の資源化を通じて“にぎわい”を作りたいとするのである。

だがここで注意しておきたいのは、自治振興会に所属し出羽三山にまつわるモノヤコトの資源化を進める山伏たちが目指すのが「単なる集客」や「単なる観光振興」ではないという点である。ワークショップでの声を具体的に拾ってみよう。2019年2月に行われた第4回目のワークショップでは、「「普段の暮らしの中にほしい“にぎわい”」ってどんなにぎわいですか?」「「こんな“にぎわい”はいらない!」どんなにぎわいですか?」というお題のもと、議論が行われている。その際にあがった声を抜粋したものが次の表である。

ほしい“にぎわい”	いらない“にぎわい”
仏像おたくイベントしてほしい	音がうるさいのはイヤ
宿坊やら三山やら文化施設にあふれんばかりのお客さんで手向の村がにぎわってほしい	ただ騒がしいだけの勘違いしたにぎわいはいらない
山伏文化にこだわったストーリーでのにぎわい	いますでにあるお祭り・行事を守っていけばよいと思う新しく何かをする必要はない

山伏修行のメッカとして短期修行から長期修行、全国からの集まり	手向のまちなみにそぐわないイベント
精進料理を楽しめるにぎわい	継承しないにぎわい
まずは夜よりも日中のにぎわい	顔の見えないにぎわい
昔の道者さんが山に登る様子	対応する側が負担になりすぎるにぎわい
三神合祭殿の価値を高めて山上と門前両方のにぎわいを	一過性のにぎわい
伝統の継承につながるようなにぎわいの場	無理に作りすぎるイベント

ほしい“にぎわい”の項目では宿坊や従来のな出羽三山信仰に関わるモノやコトに注目した答えが多く上がる一方で、いらぬ“にぎわい”では既存の祭りや行事、既存のつながりを阻害するようなにぎわい、宿坊街の雰囲気壊すようなにぎわいを避けるべきであるとの意見が目立つ。宿坊経営者達は単なる「身入りの増加」を望んでいるわけではないのだ。ワークショップの声からは出羽三山信仰にまつわるモノやコトの文化資源化を通じて、“従来の”にぎわいを取り戻したいという想いを感じ取ることができる。インタビューを重ねても、宿坊はあくまでも宿坊であり、単なる旅館やホテルではないという矜持が見え隠れする。

ワークショップの資料や調査から見えてくるのは、手向地区が「世俗」に一方的に掘り崩された結果、宗教性を失い、観光に頼らざるを得なくなってしまうという状況ではない。むしろ、山中弘が「文化産業を利用することで人々の「スピリチュアルな」欲求を取り込もうとしている」（山中 2017: 275）と表現したような、観光を利用しながら信仰や宿坊街を守ろうとする山伏達の強かな姿である。

## 4. 行政との連携

手向地区の山伏達にとって、出羽三山信仰にまつわるモノやコトが文化資源であるのと同様に、手向地区を擁する鶴岡市や山形県にとってもそれらは貴重な文化資源であるとみなされた。先述した行動計画2のサブ項目の一つ目に「歴史的風致維持向上計画」という文言が挙げられていたのを思い出してみよう。ここでいう歴史的風致とは、2008年11月に施行された通称「歴史まちづくり法」（地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律）の第1条において「地域固有の歴史・伝統を反映した人々の活動と、その活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地環境」と定義されるものである。歴史まちづくり法の趣旨は、歴史的風致の維持向上を図ろうとする市町村が「歴史的風致維持向上計画」を策定し、それを「主務大臣（文部科学大臣、農林水産大臣、国土交通大臣）が認定し、その取組を支援する」ところにある。

手向地区が存在する鶴岡市は、2013年から2023年までの10カ年計画で、「出羽三山神社と祭礼にみる歴史的風致」と「門前町手向地区と出羽三山参りにみる歴史的風致」を含む、8つの歴史的風致の保全計画を策定し、2013年11月に主務大臣より認定を受けている。鶴岡市では上述した2つの出羽三山に関わる保全計画をもとにして、サステイナブル・ツーリズムに関する講演会の開催や、「山伏の里」と記された提灯の整備、道路に面する建物や土塁、生垣、植栽等の外構を宿坊街の佇まいを感じさせる統一感のある形へと再整備する住民への費用補助などを行なった。

また、2017年、手向の宿坊街は日本遺産「自然と信仰が息づく『生まれかわりの旅』」の構成資産に認定されており、その事務局は、山形県の文化スポーツ部文化振興・文化財活用課に置かれている。日本遺産は「地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産 (Japan Heritage)」として認定し、ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形の様々な文化財群を総合的に活用する

- 池ノ仲集落 2件(宿坊2件)…住居・車庫・門の外観整備及び塗装
- 桜小路集落 1件(宿坊1件)…住居・車庫の外壁塗装替え、宿坊看板の整備
- 下長屋集落 1件(住宅1件)…住居・車庫の外壁塗装替え
- 上長屋集落 1件(住宅1件)…住居兼店舗の外観整備及び塗装
- 入江町集落 1件(住宅1件)…車庫の外壁整備



(「鶴岡市歴史的風致維持向上計画 令和2年度進行管理・評価シート」より<sup>6)</sup>)

取組を支援」<sup>7)</sup>するための仕組みで、地域に存在する個別の文化財の価値ではなく、それらをつなぐ面的な「ストーリー」が重視される。

日本遺産のタイトルとなっている「生まれ変わりの旅」とは、次のようなストーリーだ。

おおよそ1,400年前、崇峻天皇の御子の蜂子皇子が開山したと言われる羽黒山は、羽黒修験道の行場であり中樞です。修験道とは、自然信仰に仏教や密教が混じり生まれた日本独特の山岳信仰です。

羽黒修験道の極意は、羽黒山は現世の幸せを祈る山(現在)、月山は死後の安楽と往生を祈る山(過去)、湯殿山は生まれかわりを祈る山(未来)と見立てることで、生きながら新たな魂として生まれかわることができるという巡礼は江戸時代に庶民の間で、現在・過去・未来を巡る「生まれかわりの旅」(羽黒修験道では「三関三渡の行」と言う。)となって広がりました<sup>8)</sup>

先行研究に照らしたこの説明の学術的な妥当性については後述することとして、ここでは山伏達が担ってきた宗教文化が遺産の価値を証明するストーリーとして流用されていることを確認しておきたい。日本遺産登録以降、こうしたストーリーがWebや観光の現場で積極的にPRされている。

以上、ここでは行政レベルの取り組みを確認したが、「門前町まちづくりプラン」の実行計画で「歴史的風致維持向上計画」の活用がうたわれていることからわかるように、宿坊を経営する山伏達の中には行政と協調しながら、補助金を利活用していく動きがみられるのである。

## 5. 文化資源としての山伏修行

出羽三山信仰を文化資源として活用する山伏達や行政にとって、文化資源の根幹をなす重要で最も有力な「資産」が修行である。現在の手向において、山岳修行は文化資源としても活用されているのである。

現在の手向地区で行われている山伏修行を大きく分類すると、神社(出羽三山神社)による修行、寺院(荒澤寺)による修行、一部宿坊による修行とに分けられる。公開の度合いは異なるものの、多数の山伏や先達が存在している手向地区では、意思さえあれば様々な修行に参加することのできる機会と環境が整っているのである。参加情報の詳細をWeb等で積極的に公開している出羽三山神社主催の修行をリストアップしてみよう<sup>9)</sup>。

- ・秋の峰入

所要日数：6泊7日

募集人数：明記なし

参加資格：山駈等の厳しい荒行に耐え得る男子

費用：5万円

- ・神子修行道場

所要日数：3泊4日

募集人数：行堂収容人員に達し次第

参加資格：山駈等の厳しい荒行に耐え得る女子（年齢は問わない）

費用：4万円

・錬成修行道場

所要日数：2泊3日（前期・後期の2回開催）

募集人数：前期日程60名、後期日程60名

参加資格：

イ、健康なる男女（\*未成年は保護者の同意が必要）

ロ、血圧等に異常のない方

ハ、三山駈（羽黒山・月山・湯殿山一距離15km、6時間）に耐えうる方

（羽黒山御坂2,446段・月山中之宮～月山本宮・月山本宮～湯殿山本宮）

ニ、禊（水行）・正座の出来る方

費用：3万円

・回峰行

所用日数1泊2日

募集：30名

参加資格：山駈の抖擻行<sup>10)</sup>に耐え得る力を有する男女で、過去に峰中、神子修行、錬成修行道場、回峰行等、また講中での三山駈の経験者

参加費：2万5千円

・六十里越街道回峰行

所用日数：1日（前泊）

募集：20名

参加資格：山駈の抖擻行に耐え得る力を有する男女で、過去に回峰行、峰中、神子修行、錬成修行道場等、三山駈の経験者

参加費：1万5千円

現在の神社では、歴史的に羽黒修験の修行の中核であった春夏秋冬の四季の峰の一つ「秋の峰入」に加え、開山1400年を期して行われるようになった女性のための「神子修行」、山伏の行に神道の行法を加えて行われる「錬成修行道場」、近年の古道整備を一つのきっかけとして2016年より行われている「六十里越街道回峰行」などの「新しい修行」が一般公開されている。前述の通り、手向で行われる修行は神社によるものだけではなく、明治以前の構造と内容を現在に保っているといわれる荒澤寺の秋の峰や（関守2005: 124）、宿坊主催の山伏修行などが存在している。

さらに、現在の手向には教団・宿坊主催の修行に加え、様々な修行体験プログラムが存在している。例えば、羽黒町観光協会が主催する山伏修行体験塾（日帰り～2泊3日。費用は2泊3日で4万3千円）、山伏が



(Yamabusido Webページより<sup>11)</sup>)



(出羽三山子供巡礼ポスター)

代表取締役をつとめる地元企業が宿坊協力のもと開催するインバウンド向け山伏修行（体験）のYamabushido（「山伏+ 武士道」の造語。プログラムは2021年9月現在Masters Training、Basic Training、Yamabushi Guided Hikeの3種類）、子供向けの「羽黒山伏といく出羽三山子ども巡礼」など、修行をテーマにした多彩な体験プログラムが存在する。観光協会が公開している山伏修行体験塾の説明を確認してみよう。

出羽三山とは、羽黒山・月山・湯殿山の総称であり、三山をお参りすることによって人は生まれ変わると言われてきました。山伏の修行も死と再生=生まれ変わりの行であり、十界の行=断食・水絶ち・抖そう・南蛮いぶしなど厳しいものです。山伏修行体験は、白装束を身に纏い、俗世界から離れて修行の一端を体験し、出羽三山の自然、そして修験道を学びます。それはいわば、自然と一体となって自然のエネルギーを体内に吸収すること、自然と人間との共生を体感すること、そして、日本古来からの山伏の精神文化を実際に体験することで自分自身を見つめ直すことです<sup>12)</sup>。

説明文は日本遺産と同様、「生まれ変わり」のストーリーに注目するので「日本古来から」の精神文化が体験できるという。日本遺産の説明文同様、先行研究に照らしたこの説明の妥当性については後段に譲る。ただ、こうしたプログラムは「体験」をうたいながらも手向の本物の山伏が先達を務め、実際の修行のプログラムの一部を体験できるということもあり、参加者の満足度は高い。

また、神社や寺院によらないこれらのプログラムは、単に満足度が高いだけでなく、プログラムへの参加を切っ掛けとして、社寺が主催する伝統的な山伏修行への参加を決意するメンバーがいる点も見逃せない。象徴的な例を挙げておこう。現在鶴岡市にはバンティング・ティモシー（以下：Tim）氏というニュージーランド出身の山伏がいる。彼は「秋の峰入」に参加し、正式な山伏名も持っている。出羽三山の魅力に取り憑かれた彼は、Kiwi Yamabushiの名でYouTubeチャンネルを開設し、

外国人向けの修行PR動画を複数公開している<sup>13)</sup>。カナダ出身で、自身も羽黒山での修行経験がある人類学者のShayne Dahlは、近年、羽黒の山伏修行に外国人修行者が増加し、海外への情報発信が増えていることや、外国人修行者によって修行が海外へと伝播していることを紹介し、これを「グローバル修験道の勃興 (The rise of global shugendō)」<sup>14)</sup>と表現する。

山伏体験塾参加者への調査を行なった津田によれば、修行体験を求める人々と伝統的な修行を求める人々の動機には連続性があるという(津田2006: 180)。

人々は様々な思いを抱えて修行体験にやってくる。参加者それぞれの修行観や、修行体験に求めるものは、参加の額度や参加者自身の個性などの違いによって千差万別である。しかし、動機の根底に宗教的な心的境地の憧れないしは興味を抱いて参加してくるということは、修行体験でも本修行でも共通している。(中略)今回調査した修行体験は、修験道に基づいているということもあり、体を通して心に働きかけるという修行の性格を、多少なりとも感じ取ることができる貴重な場であると言える。

確認した通り、手向地区の山伏修行は現在多様に存在しており、内容もバラエティに富んでいるのだが、津田は伝統的な修行に参加をする人と修行体験に参加をする人には、動機の根底に「宗教的な心的境地の憧れないしは興味」があるという点で共通性が見出せるというのだ。この指摘には一部、慎重な議論が必要である部分があるように感じるものの<sup>15)</sup>、修行体験から伝統的な修行へと移行する人がいるという状況を理解するための助けとなる。さらに、筆者の観点によれば、津田の指摘でより重要なのは、修行体験が「体を通して心に働きかける」という仕組みを持っている点を明示したことである。津田の指摘からは、体験修行に参加したメンバーが、何かを感じ取ることにより、「宗教的な心的境地の憧れないしは興味」を増幅させて、より本格的な修行へ向かうとい

う構図が浮かび上がってくる。

興味深いことに、神社や寺が行う秋の峰の参加者は近年増加しており、若者の参加者も多いことが指摘されている(岩鼻2017: 208)。こうした事実は、これまで手向の宿坊を支えてきた講が各地で衰退する一方で、従来の講と紐づかない「個人参加」的な行者(原谷2010)が増加していることを我々に示唆している。広く一般に参加者を募集している体験修行には、これまで手向地区の宿坊や山伏たちと縁のなかった人々が数多く参加しているのだが、こうした傾向は伝統的な修行においても見出せる。こうした個人参加型の人々に、出羽三山信仰の文化資源化の中で生み出されるストーリー＝「価値の言説」が影響を与えていることは想像に難くない。これまで手向の宿坊や山伏と繋がりを持っていなかった人々が、文化資源化が推進される中で盛んにPRされる価値の言説に魅力を感じ、結果的に伝統的な修行へと行きついている可能性があるのだ<sup>16)</sup>。担い手が減少する手向の宿坊街において、これは一筋の光明である。

以上、本稿ではここまで、霞・檀那場経済が衰退する手向地区において、出羽三山信仰に関わるモノやコトを資源化することで地域振興を図ろうとする動きがあること、現在の地域では、伝統的な修行に加えて新しい修行や修行体験が多様に展開しており、それらが参加者を伝統的な山伏修行へと水路付けている可能性があることを指摘した。本節では最後に、こうした流れを「儀礼の変容」という本特集の趣旨に即してまとめておこう。まず、講の衰退に直面する手向の宿坊街では、これまで手向とはつながりのなかった人々へも門戸を開く形で、新たな修行や修行体験が生み出されている。便宜的にこれを「新たな儀礼」と呼ぶとすれば、「新たな儀礼」の誕生は手向の宿坊街における山岳修行の変容の一端といってよいだろう。

他方で、「新たな儀礼」には文化財行政や観光振興策の影響を強く受けるものも多く、これを本物の山岳修行ではないとみる人々も宿坊街には存在している。そうした人々にとって「新たな儀礼」の誕生は、山岳修行そのものの変容ではなく、あくまでも山岳修行という本物の儀礼の

外側の出来事であり、儀礼そのものの変容を意味していないということになる。だが確認したように、伝統的な修行も、現在は従来のな担い手のみに担われているわけではない。Tim氏のような外国人の参加に象徴される通り、YouTubeやSNSなどのメディアを用いたグローバルな情報発信の中で、新たな担い手が出現しているのである。どんなに少なく見積もっても、この点においては伝統的な修行にも明らかな変容を見出すことができる。手向の山伏修行はコロナ禍以前から、こうした変化の渦中にあったのだ。

## 6. コロナ禍の影響

手向集落がコロナ禍に見舞われ、何が起こったのか。コロナ禍の影響でまず大きかったのは、複数存在していた一般参加可能な修行がほぼ全面的に中止に追い込まれたという点である。一般参加可能な修行という点を強調したのは、集落の中から選ばれた2人の松聖が100日間の行を行う「冬の峰」や、一部の山伏たちが個人的・自主的に実行した修行などの例外が存在するからである。一般参加可能な修行の中止は地域にとって「外貨獲得」のチャンスとなるため、大きな経済的打撃となった。さらに、前節で確認したことを踏まえれば、修行の中止は新たな山伏を獲得する機会の縮減にもなっている。

こうした状況が長期化する中、手向地区の一部の山伏達は事態打開への手を打ち始めている。宿坊・大聖坊の例を見てみよう。既に述べたように、手向の宿坊には霞や檀那場とよばれる宿坊所縁の講中が存在する地域がある。霞の多くが東日本大震災の被災地域と重なっていた大聖坊では、以前から講員や信者以外への情報発信を積極的に行ってきたが、コロナ禍の渦中においては、先達である星野文紘氏がオンライン配信のイベントを行い、講員や信者、山伏達とのコミュニケーションを取ることに努めた。

例えば、2020年7月に行われた有料(参加費2,000円)のオンラインミーティングには820名もの申し込みがあったという。ミーティングの



(星野氏によるオンラインイベントの様子：大聖坊・加藤丈晴氏提供)

技術的なセッティングを行なった山伏は、今後はインターフェースに工夫を凝らすなどして、よりリアルに参加者に訴えかける「体験」を作っていきたいと述べる。一方で、それはあくまでも将来的な話であり、まずは「祈りの価値」を、画面を通して人々に伝えることを狙うという。

こうした動きは、先達である星野氏のパーソナリティや周囲で彼をサポートする山伏達の技術力によるところが大きく、あくまでも手向では一部の動きであるのだが、Levi McLaughlinがCaleb Carterの調査を引用しながら素早くレポートしたように、手向地区の内部に限らなければ、山伏がオンラインツールを使い集会を行う様子が既に報告されている (McLaughlin 2020)。

このような活動は、未だ渦中にあるコロナ禍の中で試行錯誤を繰り返しながら行われているもので、実質的にはほとんどの修行が再開されておらず、今後どのような変容を見せるかは経過を見守る必要がある。従って冒頭でも述べたように、現下の変化のみからいえることはさほど多くないのだが、ここでは先行研究のアイデアを補助線にしながら現状を整理し、現時点での筆者の状況理解を示しておきたい。

援用したいのは、池上良正による修行論の整理である。池上によれば、日本の修行研究の嚆矢を放った岸本英夫が「修行の組織的研究は、日本の宗教学が今後に負わされた一つの使命である」と高らかに宣言して以降、それは一向に継承発展されることなく、依然として問題提起の

段階にとどまっているという（池上 1992: 76）。池上はそうした現状の背景に、修行の学問的研究にそもそも内在するアポリア、すなわち修行が本来的に言語表現や反省的思惟を拒絶する現象であるのに対して、修行研究はそれらを武器に分析・解明の手を加えようとするという両者の決定的な矛盾や、岸本の研究の過度に「心理主義的」な方法がその後の研究者には受け入れ難かったという経緯、個人主義によせて考え抜かれた岸本の体系が極めて完結的なものであったという事情を読む。その上で池上は、修行に内包する要素を「身体的・行動性」、「主体的・自発性」、「定型的・組織性」に整理し、各々に即した研究をレビューすることで、岸本が示唆した問題の批判・継承・展開のありようを捉え、宗教学における修行研究の課題と展望を示している。

池上が示した3つの側面は、言語化を拒否する修行の諸要素の中で、研究者が観察・記述可能な要素を示したものであるともいえ、我々が手向の現状を整理・理解する上で有用である。コロナ禍により多くの修行が中止されたことは繰り返し述べた通りだが、まずコロナ禍は手向の修行から「定型的・組織性」を奪ったものとみることができる。ソーシャルディスタンスを取ることの要請により、社寺や宿坊、観光協会、個人の先達に至るまで、定型的な修行を組織だてで行うことは、現在に至るまで難しくなっている。その結果、山伏たちは個人での修行を行わざるを得なくなるが、外出自粛の要請により、それを大っぴらに行うことも憚られる状況になっている。「身体的・行動性」にも制限がかかっているのだ。結果、山伏たちが「主体的・自発性」を発揮する場は限定的になっているが、「主体性・自発性」は他の要素とは異なり、それ自体が制限されているわけではない。そのためインフラやサポート体制が整っている一部の山伏たちが、オンライン上にその発露の場を求めていると整理することができるだろう<sup>17)</sup>。

ただ、オンラインイベントを支えた山伏が、「体験」を作っていくたいと述べていることや、先述した修行体験の議論にも象徴的に現れているように、山岳修行の根本には身体性に根ざす「体験」があり、それをオンラインで再現することには難しさが伴う。この点については、臨床

心理士の東畑開人が語る、オンラインカウンセリングのエピソードが参考になる(松本、東畑 2021: 210-217)。

東畑によれば、これまでの臨床心理士の世界ではクライアントと「直接会う」ことがカウンセリングの前提であり、それはある種「神格化」されていたという。彼自身、オンラインでのカウンセリングには懐疑的であったものの、コロナ禍に際しオンライン診療に取り組まざるを得なかった。だが、実際に始めてみると当初の懸念とは裏腹に、彼はオンラインでも「案外できるところがある」との感想を得る。

具体的に彼がオンラインでも「できる」と感じた点は二つある。一つ目が情報交換で、二つ目が「being there」、すなわち相手が画面上に映ることによって「そこに相手がいる」ことをお互いに行うことができるという点である。特にメンタルヘルスの領域において、二点目は極めて重要な意味を持つという。一方で、彼は、オンライン診療の限界性も指摘する。特に難しいのは、「情報未満」のことをお互いにやり取りすることなのだそうだ。東畑の説明によれば、情報未満のこととは「言語にならないこと」である。オンライン診療でも言語による情報交換はできる一方で、そこに醸し出される雰囲気や空気と呼ばれる類の、通常は身体というメディアでお互いに察知されるものがオンライン上では交換することが難しいのだという。先の池上の議論にあった通り、修行は本来的に言語表現や反省的思惟を拒絶する現象であり、言語によるコミュニケーションのみでは、言語にならない「魅力」が伝わりにくいのだ。

本論は前項において、現在の手向地区で新しい修行や修行体験が多様に展開しており、それらが参加者を伝統的な山伏修行へと水路付けている可能性があることを指摘した。あえて図式的に再確認をすれば、この構図において資源化された修行体験と伝統的な山伏修行を架橋するものこそが、身体性に基づく体験や、体験を通して得た気付きである。講という重要な担い手が減少する中、気付きを得ることのできる体験を提供することは、山伏たちにとってはまさに命綱である。言語を通じたコミュニケーションを基本とするオンラインミーティングが果たしてこれに代わりうるのかどうか、現状では見通しが難しい状況となっている。

山伏の再生産を担う重要な回路が遮断されたこと、この点こそが、コロナ禍が手向の宿坊街に与えた最もクリティカルな影響である。

## 7. 終わりに

最後に、出羽三山における山岳修行の変容を俯瞰的にみる上で、もう一つ、見過ごすことのできない点を指摘しておきたい。本論では出羽三山信仰の文化資源化が、出羽三山信仰の担い手を再生産し得るという立場から、ポジティブなものとして描いてきた。だが既述の通り、手向宿坊街の山伏たちは決して一枚岩的な存在ではなく、地域内には文化資源化の推進や地域の観光化を危惧する声も少なからず存在している。

例えば、藤田庄市は著書『修行と信仰』の中で、現今の修行や信仰を取り巻く状況を憂慮する正善院の島津弘海大先達の声を紹介し、インターネットなどで語られる修行が、菩薩として再生するという修行の思想やリアルさを極めて矮小化していると指摘する(藤田2016: 189-192)。また、インターネットでの語りのみならず、文化資源化が進展する中で作られたストーリーの中にも、出羽三山信仰の歴史や思想を正確に伝えていない要素が紛れ込んでいる。

先に「後述する」と述べた日本遺産の解説文や観光協会による体験修行塾の解説文にもこうした要素は見受けられる。解説文では生まれ変わりの思想が説かれるが、「羽黒山古実集覧記」で夏の峰の意味づけとして登場する「三関三渡」や、秋の峰入のシンボリックな意味付けが、現代人のイメージするリフレッシュ的な「生まれ変わり」と同義なのかどうかについては慎重な議論が必要である。学術的な検証を経ず、現代的な価値観と歴史的な用語を短絡的に結びつけた「宣伝文句」が観光の現場には散見される。

日本では2020年に、いわゆる文化観光推進法(「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律」)が施行され、今後一層、文化財の観光利用が加速する見通しである。手向地区では2021年だけでも文化庁、観光庁、環境省から出羽三山信仰を資源とす

る観光化事業への助成金が支出されている。しかし、無軌道な観光推進は伝統文化を破壊し、地域の分裂を引き起こす。現在、手向の宿坊街では、こうした補助金の活用の仕方をめぐり、地域内での議論が活発化している。異なる価値観を持つ山伏同士が膝を突き合わせて、文化と経済の関係性やそのバランスを自省的に問い直す試みが始まっているのである<sup>18)</sup>。

新たに制度化された「文化観光」の推進は、山岳修行と同様に文化(財)とみなされた他の多くの宗教儀礼にも、今後、大きな変容を迫るだろう。観光化や文化資源化と切り結びながら、今日まで儀礼を維持してきた出羽三山の事例は、今後の「文化観光」が宗教文化にもたらす影響を考えための先駆的な事例でもあるのだ。

## 参考文献

---

- ・天田顕徳「山伏文化」の資源化・商品化—山形県・手向集落を事例に—(山中弘編『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』弘文堂、2020年)、169-188頁。
- ・天田顕徳『現代修験道の宗教社会学—山岳信仰の聖地「吉野・熊野」の観光化と文化資源化—』岩田書院、2019年。
- ・池上良正「宗教学における「修行論」の成果と課題」(『宗教研究』通号292、1992年)、75-100頁。
- ・岩鼻通明『出羽三山—山岳信仰の歴史を歩く—』岩波新書、2017年。
- ・島津弘海、北村皆雄編『千年の修験羽黒山伏の世界』新宿書房、2005年。
- ・鈴木正崇『女人禁制の人類学—相撲・穢れ・ジェンダー—』法蔵館、2021年。
- ・鈴木正崇『山岳信仰—日本文化の根底を探る—』中公新書、2015年。
- ・関守ゲイノー「秋の峰の歴史を歩む」(津弘海、北村皆雄編『千年の修験 羽黒山伏の世界』新宿書房、2005年)、88-127頁。
- ・津田千明「現代人と修行—羽黒町の山伏修行体験塾の事例を通して—」(『東北宗教学』2巻、2006年)、151-182頁。
- ・手向地区自治振興会『門前町手向地区地域活力創造ビジョン』手向地区自治振興会、2020年3月。
- ・長井政太郎「出羽三山とその宗教集落の盛衰」(戸川安章編『出羽三山と東北修験の研究』

- 名著出版、1975年)、157-188頁。
- ・原谷桜「現代の修験道をめぐる表象の動向—新聞と雑誌を対象に—」(『山岳修験』46号、2010年)、109-124頁。
  - ・玄武岩、藤野陽平編『ポストコロナ時代の東アジア—新しい世界の国家・宗教・日常—』勉誠出版、2020年。
  - ・藤田庄市『修行と信仰—変わるからだ変わるこころ—』岩波書店、2016年。
  - ・松本卓也、東畑開人「ケアが「閉じる」時代の精神医療心と身体の「あいだ」を考える」(奥野克巳ほか著『コロナ禍をどう読むか』亜紀書房、2021年)、207-255頁。
  - ・山中弘「消費社会における現代宗教の変容」(『宗教研究』通号389、2017年)、255-280頁。
  - ・McLaughlin Levi, “Japanese Religious Responses to COVID-19: A Preliminary Report,” in: *Asia-Pacific Journal Japan Focus*, Volume18 Issue9 Number3, 2020, pp. 1-22.

## 注

---

- 1) 歴史的には手向で宿坊を経営していたのは妻帯修験で、「恩分」や「平門人」などに分けられるが、現代の手向を対象とする本論では便宜的に山伏と総称することにする。
- 2) <https://hagurokanko.jp/facility/syukubou/> (2021年9月最終閲覧)
- 3) 同団体作成「農山漁村振興推進計画」中、「地区の現状・課題」より。
- 4) [https://www.fujitv.co.jp/b\\_hp/fnsaward/backnumber/back/99-337.html](https://www.fujitv.co.jp/b_hp/fnsaward/backnumber/back/99-337.html) (2021年9月最終閲覧)。
- 5) 手向地区自治振興会「「門前町手向地区地域活力創造ビジョン」、5頁。
- 6) [https://www.city.tsuruoka.lg.jp/seibi/rekishitekifuti/rekishikeyakunintei.files/R2\\_sinntyokuhyouka.pdf](https://www.city.tsuruoka.lg.jp/seibi/rekishitekifuti/rekishikeyakunintei.files/R2_sinntyokuhyouka.pdf) (2021年9月最終閲覧)
- 7) <https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/about/index.html> (2021年9月最終閲覧)
- 8) <https://nihonisan-dewasanzan.jp/reborn/> (2021年9月最終閲覧)
- 9) 出羽三山神社 Web ページより。一部抜粋。<http://www.dewasanzan.jp/publics/index/13/> (2021年9月最終閲覧)
- 10) 衣食住に対する欲望を払い、心身を清浄にすることを意味する仏教用語。修験道では山において「山林抖擻」を行う。
- 11) <https://www.yamabushido.jp/> (2021年9月最終閲覧)

- 12) 羽黒町観光協会 Web ページより。<https://hagurokanko.jp/341-yamabushisyugyou/taikenjuku/> (2021 年 9 月最終閲覧)
- 13) <https://www.youtube.com/c/TimBunting>
- 14) ハーバード大学 Japan Forum Lecture Series における講演において (2021 年 10 月 15 日開催。演題は ANCIENT SPIRIT, MODERN BODY: The Rise of Global Shugendō.)
- 15) フィールドから得られた知見でいえば、筆者は「供養」の存在を考慮に入れる必要があると感じている。津田の修行体験の調査では「供養」を参加動機として挙げた参加者は見出せないが、伝統的な修行への参加者には「供養」を動機として語る人間が一定数存在する。これはあくまでも一例であるものの、筆者は修行体験への参加者と伝統的な修行への参加者の動機が完全に連続しているとは考えていない。
- 16) 筆者は現代の吉野を事例として、こうした状況を「修験道の解放化」とよび、観光化の推進が新たな行者を生み出す揺籃にもなり得ることを示した (天田 2019)。
- 17) また、現在のオンラインミーティングで強調されるのが、「祈り」である点も非常に興味深い。動的な行よりも静的で個人でも実践可能な行のあり方が強調されている点もコロナ禍における特徴の一つとして指摘しておきたい。
- 18) 例えば、2021 年に出羽三山門前町プロジェクトが受託した文化庁の「上質な観光サービスを求める旅行者の訪日等の促進に向けた文化資源の高付加価値化促進事業」では、価値再発見ワーキングと称する勉強会が行われている。これは手向地区自治振興会が主催し、出羽三山門前町プロジェクトが共催、鶴岡市が後援という形を取るもので、神社関係者、寺院関係者、宿坊関係者など地域の宗教的なステークホルダーが一堂に会して地域の歴史を学び、伝統信仰と地域振興のバランスを考えている。